
Modest promise

雪原歌乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M o d e s t p r o m i s e

【Nコード】

N 6 3 4 1 V

【作者名】

雪原歌乃

【あらすじ】

此方は長編恋愛小説『雪花』のアナザーストーリーです。

宏樹視点、彼が高校生の頃の話となっております。

幼少期の紫織も登場します。

(前書き)

此方は長編恋愛小説『雪花』のアナザーストーリーです。
宏樹視点、彼が高校生の頃の話となっております。
幼少期の紫織も登場します。

普段は几帳面な人なのに、ノックも忘れてドアを開けてきた事に、さすがの俺も驚きを隠せなかった。だが、そんな気持ちとは裏腹に、「何？」と、我ながら他人事のように母親に話しかけている自分がいた。

母親からしたら、何随分と呑気に構えてんの、といった心境だったんだろう。苛立ちを露わにしながら、「あんた、紫織ちゃんが行きそうな場所に心当たりない？」と訊ねてきた。

「紫織ちゃん、こんな時間になってもまだ帰って来てないそうなのよ。幼稚園から一度戻ってから、『ちょっと遊んで来るね』と言ったっきり……。」

加藤さんの奥さんは最初、てっきり、ウチに遊びに来ているものだと思ひ込んでいたらしいけど、今日は一度もウチには来てないでしょ？ だから……。」

母親の話を一頻り聴いた俺は、なるほどな、と心の中で独り納得していた。もちろん、大変な事態になっている事には変わらないし、心配もしている。

「で、それを俺に報告してどうするつもりだったわけ？」

この質問は迂闊だった。口にしてしまってから後悔したが、後の祭りだ。

案の定、母親は、部屋に押し入って来た時以上に表情を険しくさせ、「あんたって子は！」と怒号を浴びせてきた。

「こんな時に、どうしてそんな冷たい事言うのっ？ 紫織ちゃん、今頃どこかで泣いてるかも知れないってのに……。——我が子ながらほんとに情けないわ……。！」

そこまで言うと、母親は、大袈裟なまでに深い溜め息を漏らす。

俺は苦々しさを感じつつ、それでも、出来る限り表には出さぬようにと冷静を装いながら言った。

「分かった。俺も紫織を探しに出るよ。親父も行くんだろ？」

俺の言葉に、母親は少しばかり驚いていたが、やがて、ハツとしたように「そ、そうね」と口にした。

「宏樹も探してくれるならば助かるわ。あとは、ウチのお父さんはもちろんだけど、加藤さんの旦那さんも、今日はたまたま早く帰っていらっしやったみたいだから」

コートを着て外に出ると、既に、俺の親父と紫織の両親が家の前で待機していた。

「悪いな、宏樹君」

真っ先に声をかけてきたのは、加藤の小父さん——紫織の親父さんだった。

サービス関係の仕事をしている小父さんは、忙しい毎日を送っているため、こんな早い時間帯に家にいる事は滅多にない。

珍しい事もあるもんだな、と思っていたら、まるで俺の心の中を見透かしたかのように、「今日は珍しく早く上がれたんだよ」と苦笑した。

「仕事とは言え、普段、紫織をほったらかしにしてるのには変わらないからね。だから今日ぐらいは、あいつの相手をしてやろうかと思っただけだ……」

そう言うなり、小父さんは落胆を露わにした。大事な一人娘の姿が消えてしまったショックは、計り知れないものがあつたのかも知れない。

加藤の小母さんに至っては、今にも卒倒してしまうのではないかなと思えるほど、顔面蒼白になっている。

「加藤さん」

娘の安否で一杯になっている加藤夫妻に、俺の親父が優しい声音で言った。

「とにかく、一刻も早く探しに出ましょう。まだ、紫織ちゃんに何かあつたと決まったわけじゃないんですから。宏樹もいますし、き

つとすぐに見付かりますよ」

「そ、そうですね。父親の俺がしっかりしませんと」

小父さんの言葉は、まるで自分に言い聞かせているようだった。俺は神妙な気持ちで二人を見比べながら、「俺も頑張って探しますから」と、気休めにもならない事を言った。

けれども、小父さんはそれがよっぽど嬉しかったみたいだ。口許に笑みを浮かべ、「ありがとう」と返してくれた。

「それじゃあ、早速手分けして探しましょう」

親父の号令を合図に、俺と親父、小父さんは、それぞれ、紫織を探しに出た。

「紫織ー！」

頼りない街灯の下を小走りで通り過ぎながら、俺は大声で紫織の名前を呼び続けた。

辺りはとつくに暗くなっている。人によっては迷惑だと気分を害してしまうかも知れないが、今は、そんな事を一々気にしている場合じゃない。

事は一刻を争う。無事だと信じたいが、万が一、という事も考えられる。

——早く見付け出さないと……！

俺は小走りで、ありとあらゆる場所を探し回る。

公園、紫織の通っている幼稚園、大好きな店の前——

ところが、どんなに探してみても、紫織らしき姿は見当たらない。こんな時間帯に、幼い子供がその辺をウロウロしていれば、結構目立つはずだが。

——どこににいるんだ……？

真冬の夜の冷気は、俺の体力を少しずつ奪ってゆく。寒さに堪えられるだけの自信はあるつもりだが、さすがに、長時間となると厳しい。

——紫織はどうなんだ？

ふと、寒さと暗がりには怯えて泣いている紫織の姿が目には浮かんだ。一人っ子で、俺を本当の兄のように慕って甘えてくる紫織。可愛いと思う反面、正直な気持ち、煩わしさを感じる事もあった。

朋也という本当の弟ですら、時々、相手が面倒臭いと思っていたほどだった。

——あいつらさえいなければ、俺はもっと自由だったはずだ……そんな事を考えたら、躍起になって探すのに嫌気が差してきた。もう、どうでもいい。もしかしたら、今頃きつと、父親か小父さん辺りが見付けたかも知れない。

俺はその場にしゃがみ込んだ。何度も息を切らし、その姿勢のままで夜空を見上げる。

重苦しい雲が空を占領している。月も星も全く見えない。見ているだけで、自分の気持ちもどんどん沈んでくる。

探したくなんかない。けれど、親父達が見付けていなければ、紫織は心細さと寒さのあまり、どこかで泣きじゃくっているだろう。

——もう少し探すか……

俺は再び立ち上がった。そして、改めて、落ち着いて紫織が好んで行きそうな場所を考えた。

と、その時だった。

『あのね、あたし、とってもすごいところをみつけたんだよ！』

つい数日前、紫織が言っていた台詞が頭に浮かんできた。

俺は記憶の糸を手繰り寄せる。

『ほら！　ここ、まるでひみつきちみたいでしょ？』

ほんとはだれにもいわないつもりだったけど、コウキくんにはおしえたかったの。あ、トモヤにもぜったいにいっちゃダメだよ！』

「そうか！」

俺の心の中に光が差し始めた。

——間違いない！ 絶対あそこに紫織がいる！

俺は全速力で走った。

紫織がいるように、と強く願いながら——

着いた場所は、大きな土管が無造作に置かれている空き地だった。まるで、小さなトンネルのようになっているそれには、小さな子供であれば余裕で入る事が出来る。

「紫織ー！」

俺は大声で呼びながら、空き地の中へと足を踏み入れ、土管の中を一つ一つ確認する。

その時、どこからともなく、幼子のすすり泣くような声が聴こえてきた。

——まさか……！

俺は耳を澄ましながら、泣き声のした方へと近付く。声は少しずつ大きくなっていった。

「紫織！」

俺は、一番声が響いてきた土管の中に向かって呼んだ。すると、それに呼応するように、這うような姿勢で、小さな身体がこちらへと向かって来た。

それは、紛れもなく紫織だった。

「コウキくん！」

土管から出た紫織は、真っ先に俺に抱き着いてきた。

一瞬だけ触れた手は氷のように冷え切っており、どれほど寒さに凍え続けていたかが伝わってきた。

「つたく……。みんな心配してたんだぞ？」

「えっ……。うっ……。ごめん……。なさ……。いっ……」

泣きじゃくりながらも、必死で謝罪する紫織。

そんな姿を見ていたら、怒る気持ちも湧かなくなった。

寒さの限界を超えていた紫織は、歩く体力がすっかりなくなっていたため、帰りは俺がおぶった。

紫織は、落ちないようにと一生懸命しがみ付き、俺もまた、何度も小さな少女を背負い直す。

「コウキくん」

背中越しに、紫織が声をかけてきた。

「ん？ どうした？」

「ねえ……、ずっと、あたしといっしょにいてくれる？」

紫織の言葉に、俺は答えに窮した。

ずっと一緒に――

その願い、聞き入れてあげられるだけの自信はなかった。けれど、無下に否定する事も出来ず、「ああ」と頷いていた。

「一緒にいてやるよ」

やっこの思いで口にした。

「ほんと？　ずっといっしょだよ？」

「――ああ。ずっとだ」

「よか……った……」

紫織の声が、ゆっくりと掻き消されていった。

その後を追うように、今度は、スウスウと寝息が聴こえてきた。

俺の方便に、紫織はすっかり安心したらしい。

「約束、か……」

俺は独りごち、空を仰いだ。

すると、夜空から白いものがはらはらと舞い降りてきた。

「――雪だ」

今年に入って、初めての雪だった。

生まれたてのそれは、地上に落ちると、あっという間に消えてなくなってしまう。だが、そんな儂い雪も、降り続ければ、辺りを銀

色の世界へと染め上げてゆくだろう。

「明日が楽しみだな、紫織」

眠っている紫織に言ってみる。

当然、紫織からは答えが返ってこない。その代わり、何か夢でも見ているのか、何やらごによごによと寝言を呟いている。

「呑気な奴……」

俺は苦笑すると、紫織を背負い直した。

日に日に成長しているのか、以前におぶった時よりも重みを感じる。

「女の子に『重い』ってのは禁句だよな」

誰にともなく言うのと、俺は、雪の降りしきる中、みんなが待っている家路へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6341v/>

Modest promise

2011年9月30日03時29分発行